はじめに

那須与一ほど謎の多い人物はおりませんし、「那須与一」ほど謎の多い物語もありません。

『平家物語』の「扇の的」は史実なのか。

扇の的に込められた意味は何だったのか。

与一が射た扇の的までどのくらいの距離があったのか。

この物語に込められたメッセージは何だったのか。

この物語はどこで誰によってつくられたのか。

なぜ敵である平家までも与一の射扇（しゃせん）を称賛したのか。

なぜ「宗隆（むねたか）」「資隆（すけたか）」二つの名が流通しているのか。

そもそも那須与一という武将は実在したのか。

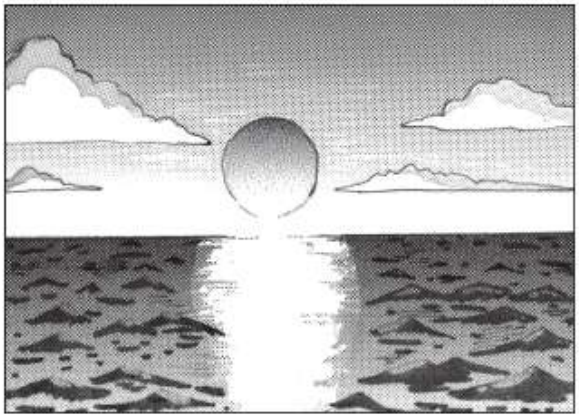
――これらはすべて、これまで解明されていなかったことです。

「扇の的」は中学校の教科書に採録されているほどの有名な章段であり、那須与一もその生誕地に資料館（栃木県大田原市の那須与一伝承館）さえあるほどの著名人であるのに、何もわかっていないのです。

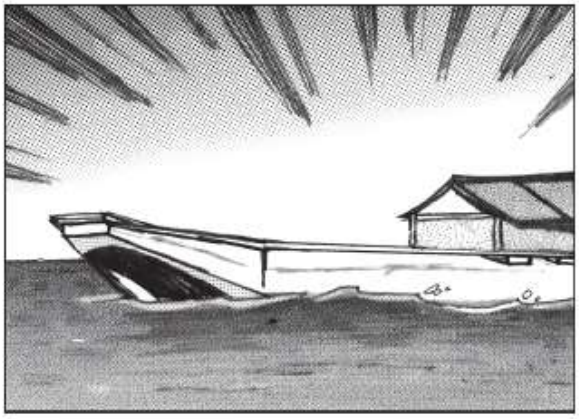
本書では、これまで未解明とされてきたこれらのことを、解き明かしてゆきます。

※　本書では、人物を指す場合は那須与一、『平家物語』の章段名を指す場合はカギカッコを付けて「那須与一」と表記します。『平家物語』の異本は数多くありますが、その中でも一般にもっともよく読まれている覚一本を中心に用います。『平家物語』巻一一「那須与一」の本文は、巻末に掲載しています。引用した『平家物語』諸本や『玉葉』『吾妻鏡』は読みやすくなるよう表記を改めています。

「那須与一」あらすじ



1――平家方と源氏（義経）方の屋島でのいくさは、決着が着かないうちに夕暮れとなった。

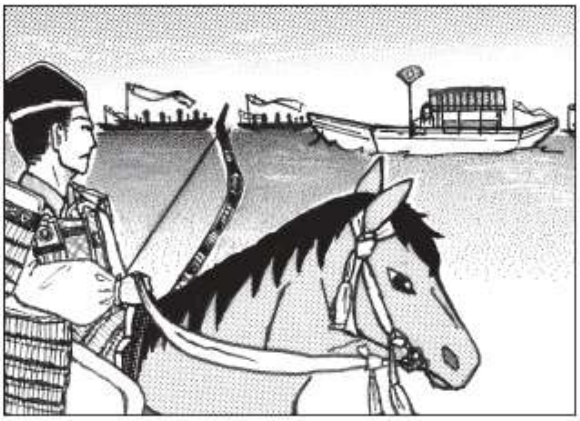


2――義経方の軍勢が撤退しようとしていると、沖のほうから立派に飾った小船が一艘、水際に漕ぎ寄せてきた。

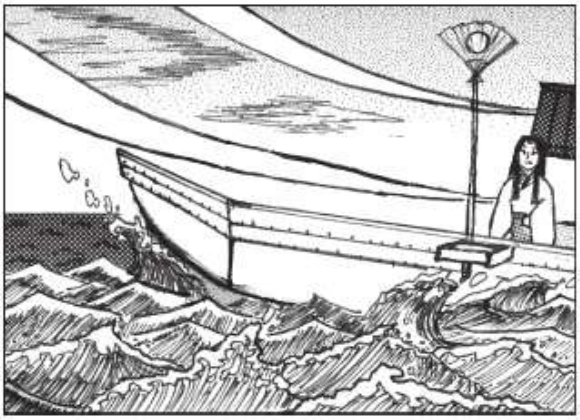
3――小船の中から美しい女房が出てきて、扇を舟の上に立てて手招いた。義経は後藤実基を呼び寄せ、「あれは何か」と尋ねる。

4――実基は「扇を射よということだろう」と答え、戦占いであることを教える。さらに「誰に扇を射させるべきか」と義経に尋ねられた実基は、下野国の若武者・那須与一を推挙する。

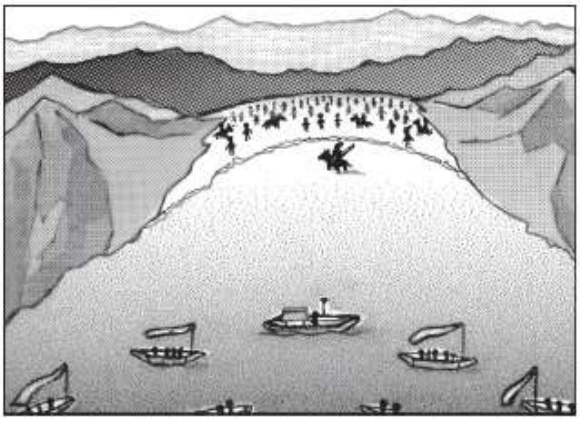
5――義経に召し出された与一は、掲げられた扇を射落とすよう命じられる。与一は、「確実に射落とす自信がない」と言って義経の命令を辞退したが、義経に厳しく叱責され、命令を受け入れた。



6――与一はたくましい黒い馬にまたがって水際に向かった。海中へ一段ほど乗り入れたが、まだ扇までは距離があった。



7――そのうえ、夕暮れ時であるのに北風が激しく吹き、波も高かった。船も的の扇も波に揺られて安定しなかった。

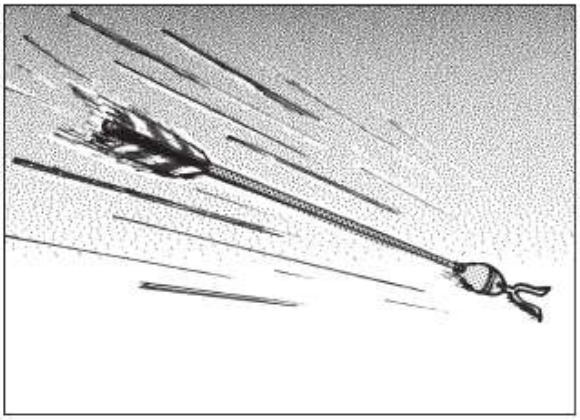


8――沖では平家方が船を並べて見物し、陸では源氏方が馬の轡を並べて見ている。

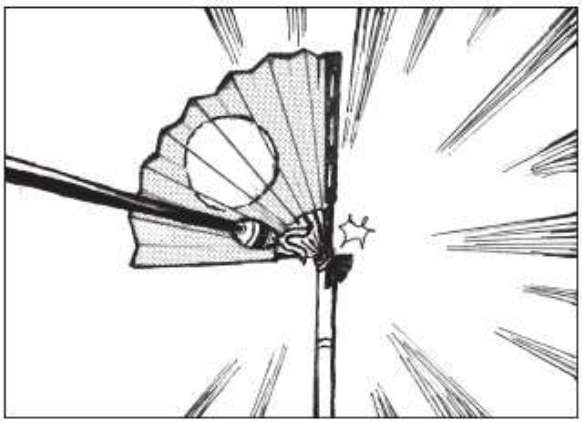
9 ――与一は目を閉じ、どうか扇の真ん中を射させてほしいと神仏に祈った。それから目を開くと、風が弱まり、扇も射やすそうに見えた。

10 ――与一は鏑矢を取って弓につがえ、十分に引き絞ってから……、

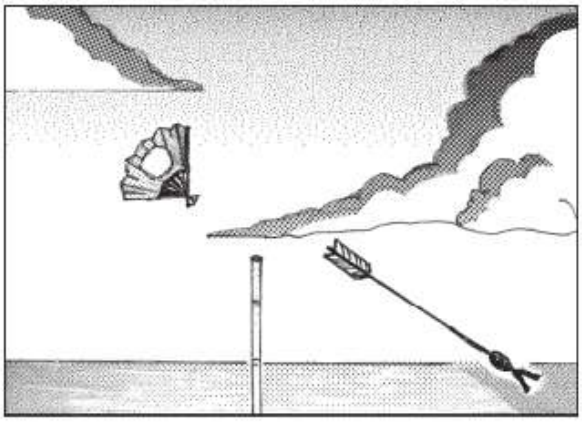
11 ――ひゅうっと射放した。



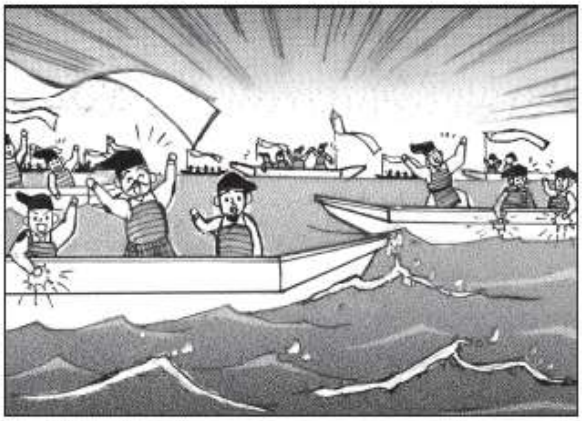
12 ――強弓によって放たれた鏑矢は浦一帯に響くほど長く鳴りわたり……、



13 ――扇のかなめの際から一寸（約三センチ）くらい上を射切った。



14 ――鏑矢は海へ落ち、扇は空へ舞い上がった。扇はしばらく空中にひらめいていたが、春風にもまれて海に入った。



15 ――夕日が輝くなかに、金の日輪を描いたみな紅の扇が波に揺られている。これを見て、沖では平家方が船端を叩いて感嘆し……、

16 ――陸では源氏方が箙を叩いてどよめいた。

目次

はじめに……1
「那須与一」あらすじ……2
読解編……7
第一章　扇の的の謎を解く……9
良い〈読み〉とは……10
第一節　鏑矢（かぶらや）とは……11
1　雁股とは……12
2　鏑とは……13
【コラム1　鏑矢の歴史】……14
第二節　与一の背中にある矢――矢いくさの実相に及ぶ――……15
第三節　波風、船の揺れの再現……18
【コラム2　北西の季節風か】……22
第四節　逆接表現で示す逆境……23
【コラム3　現地史跡の祈り岩・駒立（こまたて）岩】……24

第五節　鏑矢を用いた理由――〈いくさ占い〉……27
【コラム4　巫女（みこ）の装束】……29
【コラム5　いくさ神・いくさ占い】……31
第六節　「小兵」ゆえのハンディ……32
第七節　矢は長いのか短いのか、弓は強いのか……34
第八節　「七段ばかり」は二〇メートルか七七メートルか……38
第九節　義経が与一に〝鎌倉へ帰れ〟と言うことの重み……41

第二章　物語の仕掛けを見破る……47
V字型構想とは……48
第一節　扇の的現る――一つ目のV字型　下降↙部……49
第二節　実基（さねもと）の謎解き――一つ目のV字型　上昇↖部……51
【コラム6　実基の人物像】……54
第三節　若武者を襲う試練――二つ目のV字型　下降↙部……57
第四節　ゾーンに入った与一――二つ目のV字型　上昇↖部……59
【コラム7　丸（まろ）ぼやの家紋】……64
第五節　追い詰められての〈神頼み〉――三つ目のV字型　下降↙部……69
第六節　扇も射よげ――三つ目のV字型　上昇↖部……74

第七節　三つのV字型構想の小・中・大……77
第八節　「那須与一」のクライマックス
——〈心理劇〉としての「那須与一」——……80

第三章　物語の表現構造を見抜く……87
カメラの〈寄り〉と〈引き〉……88
第一節　「那須与一」のリアリティ……89
第二節　エンディングの聴覚・視覚の世界……93
第三節　操(あやつ)られる時間——〈串だんご〉理論——……98
第四節　前半の趨勢(すうせい)表現……101
第五節　装束描写の過去形と現在形……104
【コラム8　源平の軍勢の数と質】……108
第六節　なぜ敵である平家までも与一を称賛したのか
——〈源氏神話〉の寿祝(じゅしゅく)性——……108

研究編……115

第四章　「那須与一」と『平家物語』のあやしげな関係を明かす……117
『平家物語』の多様なバージョン……118

第一節　屋島合戦譚における「那須与一」の独立性……119
第二節　屋島合戦譚の後次性――「那須与一」の本当の意味――……123
第三節　「七段ばかり」の決着……128
第四節　「武者舞」の解読……132
【コラム9　教材「扇の的」のゆくえ】……138
第五節　屋島合戦譚の流動展開と〈プラットフォーム〉論……139
1　〈プラットフォーム〉という考え方……139
2　屋島合戦譚の諸本異同……143
3　屋島合戦譚が二日間である理由……144
4　「扇の的」は屋島合戦か志度合戦か――四部本――……145
5　「那須与一」の本編への組み入れ――長門本のV字型構想――……148
6　『源平盛衰記』の逆V字型構想……149
7　延慶本の特異性……149
8　バランス型の覚一本……151
第五章　「那須与一」が発するメッセージを突きとめる……155
物語の重層性……156
第一節　那須与一の非実在性――『那須系図』諸本を手がかりに――……157

1　不自然な接合痕から……157
2　那須与一は宗隆か資隆か……162
第二節　那須与一のモデル那須光助（みつすけ）……167
【コラム10　与一の血統の存続問題】……172
第三節　那須光助が駆けた那須野……174
第四節　「那須与一」に込められたメッセージ――反鎌倉・反体制――……181
第五節　四部本の「那須与一」……185
第六節　「那須与一」の成立圏と〈綱引き〉論……187
第七節　後藤兵衛実基（ごとうびやうゑさねもと）と〈怨親平等（おんしんびょうどう）〉論……193
1　実基像の虚構性……193
2　実基像のモデル後藤範忠（のりただ）・後藤内貞綱（ごとうないさだつな）……195
3　近藤親家（ちかいえ）像の虚構性……201
4　伊勢三郎像の虚構性……205
5　後藤・近藤・伊勢を物語に登場させることの意味……208
6　誰のための〈怨親平等〉か……212
第八節　波状的な〈綱引き〉の痕跡……214
第九節　史実と虚構の二元論を超えて……216

第六章　「那須与一」の形成過程を解き明かす……221
「那須与一」のパーツ論を越えて……222
第一節　「那須与一」の着想――住吉神鏑(しんてきたん)の本源性――……223
第二節　「那須与一」にみえる住吉神鏑(しんてきたん)の痕跡――「弓切り折り」――……226
【コラム11　『平家物語』研究の現在】……233
第三節　〈神頼み〉の背景としての二荒(ふたら)山神話、俵藤(たわらのとう)太(た)伝承……234
第四節　扇の的の成立……238
第五節　「与一」という名前の着想……241
第六節　『今昔物語集』源頼光射狐(しゃこ)譚の影響……245
第七節　「那須与一」と『那須系図』と「鵺(ぬえ)」……248
第八節　「那須与一」のオリジナリティ……259
第九節　『平家物語』の全体を窺う窓としての屋島合戦譚……261
おわりに……264
参考資料……267
『平家物語』巻一一「那須与一」本文……267
『常山紀談』巻一「輝虎、平家を語らせて聞かれしこと、付けたり佐野天徳寺のこと」……270

『即成院縁起』（『続群書類従』第二七輯上）……271
『那須系図』（『続群書類従』第六輯上）……275
参考文献……277
コラム一覧……291
図版一覧……291
謝辞……297
索引……001左

おわりに

源頼朝の人生は〝平治合戦の敗北によって伊豆の蛭（ひる）が小島（こじま）に流されたのについには平家を滅ぼして鎌倉幕府を開いた〟という明瞭なドラマ性をもっています。豊臣秀吉も〝尾張国（おわりのくに）中村の農民の出身であるのに天下統一を成し遂げた〟というドラマティックな生涯です。坂本龍馬は〝土佐国の下級武士の家に生まれながらつねに私心なく天下国家の行く末を考え、犬猿の仲であった薩摩と長州を結び新時代を招いた〟という功績がたたえられます。そのような偉人たちになぞらえることが許されるならば、那須与一は、

坂東の辺縁の貧しい家に生まれ、
跡継ぎにはなりえない一一人兄弟の末っ子でありつつも、
ふるさとの人びとに支えられながら、
那須野で弓馬の修練にたゆまず励んでその技量を高め、
壇の浦合戦の前哨戦である屋島合戦で扇の的を射抜いていくさ神の加護を引き寄せ、
全軍の士気を上げ、
それによって平家討伐を成し遂げた、

ということになるでしょうか。そしてそこには、

鎌倉中心の御家人たちだけでは成しえなかった偉業が、

武士社会の〝縁の下の力持ち〟だとみられていた人々によって成し遂げられた、とのメッセージが込められていたとみられます。社会を新時代へと大きく動かそうとするときに権力の集中が必要になり、それを支える側に回った人々もまた欠かせない存在だったのだろうと思います。それも与一ひとりの手柄ではなく、周囲の多くの人々に支えられて成し遂げられたことなのでした。母や姉が準備したらしき「直垂（ひたたれ）」「小総（こぶさ）の尻懸（しりがい）」に至るまで、無駄な表現はなかったということでしょう。読者のみなさまの中にあった那須与一の人物像や『平家物語』のイメージを少しでも変えられたなら、著者としましてはこのうえない喜びです。

さて、本書の構成は次のように感じられるかもしれません。第一章・第二章・第三章は文学研究や国語教育に携わるかた向け、とりわけ第二章・第三章は認知論・指向論に関心のある大学院生・大学生向け、第四章・第五章・第六章は『平家物語』の専門家や歴史学者向け、などと。しかしわたくしの意識の中ではそのように区分けされているわけではなくすべて一体のものですし、少し頑張っていただければ全編を中学生・高校生にもお読みいただけるものだと思っています。一般向けも専門家向けもないという考え方です。レベルが高いも低いもありません。むずかしく書いてあるのが学術書で、カバー絵にマンガがあれば一般書だということもないでしょう。

また、わたくしは、文学のみならず、政治社会史でも、思想史でも、神話学でも、論文を書いています。〝人間とは何か〟〝人間が生み出した社会はどのようなものか〟を考えるのが学問（人文学）本来の姿であるならば、そこに領域や縄張りがあってはならないという考え方

です。そもそも、中学生向けに語る真実と大人用のそれとが別々だということはありえませんし、歴史学者が考える時代相と文学研究者がうかがうそれとがずれるのもおかしいことです。学問にとって大切なことは、真を突いているかどうか――そこだけです。警察官に職務質問をされて突然逃げ出した男がいる（現在）とすると、男が防犯カメラの少ない裏道を選んで逃走すること（未来）も察しがつきますし、そもそも逃げなければならないような悪事を働いたのだろうということ（過去）も見えてきます。虚構する心理（指向）や仕組みが見えてくれば、実像がどのようなものであったかも、おのずと浮かび上がってくるというわけです。わたくしの中では、文学研究と歴史学がこのようにつながっていることをご理解いただければと思っております。